

令和8年度 情報教育部会研究計画

1 研究主題

未来を切り拓く情報活用能力の育成を目指した授業の創造と推進

—1人1台端末環境における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実—

2 研究主題について

現在、生成AIに代表される、人工知能、ビッグデータ、Internet of Things(IoT)、ロボティクス等の先端技術が急激に進化し、それらがあらゆる産業や社会生活に取り入れられ、サイバー空間とフィジカル空間の高度な融合を目指した Society5.0 時代が到来しつつある。それに伴って、社会の在り方が日々加速度的に変化する状況が生じている。

令和5年6月16日に閣議決定された「教育振興基本計画」では、「持続可能な社会の創り手の育成」「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の2つのコンセプトが示された。また、5つの基本的方針の中に「教育DXの推進」が明記されている。その中で「初等中等教育においては、学習の基盤となる資質・能力としての情報活用能力を育成するとともに、そのための教師の指導力向上・ICT環境整備の更なる充実が求められる^①」と示されている。令和6年3月に示された「徳島教育大綱・徳島県教育振興計画（第4期）」にも、重点項目I「未来を拓く力を育む教育の推進」の推進項目1に「学びを豊かにする教育DXの推進」について示されている。こうした国・県の教育施策の方向性を踏まえ、次期学習指導要領改訂に向けた動きにも目を向ける必要がある。

本部会では令和3年度より、「未来を切り拓く情報活用能力の育成を目指した教育活動の推進」を研究主題として研究を進めてきた。本主題は、先の「教育振興基本計画」「徳島教育大綱・徳島県教育振興計画（第4期）」に沿った重要な研究テーマであると考え、その内容は今年度も引き継いでいく。

さらに、昨年度は、研究主題を「未来を切り拓く情報活用能力の育成を目指した教育活動の推進」から「未来を切り拓く情報活用能力の育成を目指した授業の創造と推進」に変更を行った。その理由としては、「教育活動」という広範な概念から、より具体的な「授業」に焦点を当てることで、研究をより深く、詳細に行えるようにするためである。また、「推進」という表現に、「創造」という言葉を加えることで、研究が単なる理論的な考察にとどまらず、授業の創造を通じて、情報活用能力育成のための新たなモデルや手法の開発も含む研究を目指したいと考えたからである。

「教育振興基本計画」には、「第2期教育振興基本計画において掲げられるとともに、第3期教育振興基本計画においてもその理念が継承された『自立』、『協働』、『創造』については、『自立』と『協働』は個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に対応する方向性であり、『創造』は主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善を通じてもたらされるものである。これまでの計画の基軸を発展的に継承し、誰もが地域や社会とのつながりや国際的なつながりを持つことができるような教育を推進することで、個人と社会のウェルビーイングの実現を目指すことが重要^②」とも示されており、本部会が副主題に掲げてきた「—「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実—」も主題達成のための大きな役割をもつと考え、引き続き副主題として研究を進める。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図りながら、情報活用能力の育成を目指し、様々な教育活動の中で、まずは子供が安心して参加できる授業を創造し、推進できるように研究を進めていく。

第 54 回放送教育研究会徳島大会、第 54 回徳島県小学校放送・情報教育研究大会の研究校である東みよし町立昼間小学校では、令和 5 年度、「未来を切り拓く情報活用能力の育成を目指した教育活動の推進」という主題のもと研究が行われ、校内研修や授業実践が進められた。

それらの成果と課題を受け、令和 6 年度は、サブテーマとして、「一人一人のよりよい学びをめざし、考えを広げる教育活動の充実」が追加され、個別最適な学びや協働的な学びを充実させることに重点を置いて取り組まれた。研究の柱として、①情報モラルを育成する教育活動の推進（情報モラル）②問題解決・探究の端末活用に関する教育活動の推進（情報活用）③プログラミング的思考を育成する教育活動の推進（プログラミング）の 3 つの領域ごとに、各学年の子供の実態に応じて重点的に指導が行われ、子供の情報活用能力の向上が図られた。

大会当日は、1 年生（情報活用）生活科、2 年生（情報モラル）特別活動、3 年生（プログラミング）音楽科、4 年生（プログラミング）総合的な学習の時間、5 年生（情報活用）外国語科、6 年生（情報モラル）総合的な学習の時間の 6 つの授業公開が行われた。Chromebook^注（注: Google LLC 商標）や思考ツールなどを効果的に活用し、個別最適な学びや協働的な学びに取り組む子供の姿が見られ、研究の成果が多分に見られる授業が展開された。公開授業、分科会後の全体会では、東京学芸大学教職大学院教授/学長特別補佐の堀田龍也先生が登壇し、「NEXT GIGA に求められる情報活用能力の育成」と題した講演が行われた。昼間小学校の研究成果を称賛された上で、「NEXT GIGA 時代には、子供たちの 1 人 1 台端末を利用した個別最適な学びや協働的な学びに関する積極的なチャレンジと、前向きな失敗を奨励するくらいの学校の雰囲気作りが必要」と述べられた。また、クラウドを活用した、途中参照や他者参照の機会の必要性とそこから子供自らが学ぶスキルを身に付ける学習指導の実践の重要性について指導いただき、大変有意義な大会となった。

本部会では、学習指導要領の確実な実施を通して、「持続可能な社会の創り手の育成」「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」の礎となる情報活用能力の育成を図るのはもちろんのこと、令和 3 年 1 月 26 日に中央教育審議会より出された『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して~全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現~(答申)』（以下「答申」）で示された「新たな ICT 環境や先端技術を最大限活用することなどにより、基礎的・基本的な知識・技能や言語能力、情報活用能力、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力の確実な育成が行われるとともに、多様な児童生徒一人一人の興味・関心等に応じ、その意欲を高めやりたいことを深められる学び^③」の実現も視野に入れ、研究を行っていく。そのためには、全ての教育活動において 1 人 1 台端末を最大限に活用し、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図り、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善についての研究も進めていく必要があると考える。

令和 7 年 9 月に中央教育審議会教育課程企画特別部会より示された「論点整理」では、次期学習指導要領改訂に向けた方向性として、「主体的・対話的で深い学び」の実装や情報活用能力の抜本的向上、質の高い探究的な学びの実現の重要性が示されている。そこでは、ICT や生成 AI を単なる教具としてではなく、思考を広げ深めるための学習ツールとして活用し、子供自身が問いをもち、情報を収集・整理・分析しながら考えを更新していく探究的な学習過程の充実が求められている。これらの考え方は、本部会が掲げる研究主題とも強く重なり合うものであり、今後の研究を進めていく上での重要な指針となる。こうした方針を踏まえ、1 人 1 台端末環境を生かし、生成 AI やクラウド環境を活用した探究的な授業の創造を通して、主体的・対話的で深い学びの実現を目指していく。

これまでに本部会では、情報モラル教育やプログラミング教育、放送教育などを柱として研究を進めてきた。特に放送教育では、現在の「情報教育部会」の前身である「視聴覚教育部会」の頃から学校放送番組の効果的な活用の仕方についての研究を行ってきた。これらの研究の成果は、本部会が今後の研究の方向性として考えている「教育振興基本計画」「令和の日本型学校教育」「徳島教育大綱」で挙げられている方針の実現にも大いに寄与するものであると考える。

なお、本研究主題は、令和8年度徳島県小学校教育研究会研究主題である「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進 ー学習を調整し、多様な他者と協働することを通して 主体的・対話的で深い学びを実現し よりよく学び続ける力を身に付けた子供の育成ー」を受け、情報教育部会として令和8年度の研究の方向性を示すものである。

3 研究主題の解説

(1)「未来を切り拓く情報活用能力」について

◎情報活用能力

「教育の情報化に関する手引」においては、「情報活用能力をはじめ、言語能力や数学的思考力などこれからの時代を生きていく上で基盤となる資質・能力を確実に育成していく必要がある、そのためにもICT等を活用して、「公正に個別最適化された学び」や学校における働き方改革を実現していくことが不可欠である^④」とされており、情報活用能力の重要性は年を追うごとに高くなっている。

情報活用能力は「情報活用の実践力」「情報の科学的な理解」「情報社会に参画する態度」の3観点と8要素に整理されていた。現在は、各教科等において育むことを目指す資質・能力と同様に「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱によって次のように示されている。

○知識及び技能(何を理解しているか、何ができるか)

情報と情報技術を活用した問題の発見・解決等の方法や、情報化の進展が社会の中で果たす役割や影響、情報に関する法・制度やマナー、個人が果たす役割や責任等について、情報の科学的な理解に裏打ちされた形で理解し、情報と情報技術を適切に活用するために必要な技能を身に付けていること。

○思考力、判断力、表現力等(理解していること、できることをどう使うか)

様々な事象を情報とその結びつきの視点から捉え、複数の情報を結びつけて新たな意味を見出す力や、問題の発見・解決等に向けて情報技術を適切かつ効果的に活用する力を身に付けていること。

○学びに向かう力、人間性等(どのように社会・世界と関わりよりよい人生を送るか)

情報や情報技術を適切かつ効果的に活用して情報社会に主体的に参画し、その発展に寄与しようとする態度等を身に付けていること。

文部科学省(2019)「教育の情報化に関する手引」^⑤

◎未来を切り拓く

これからの社会を生きていく子供にとって、次のことが必要になると考える。

一人一人が自分のよさや可能性を認識して、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら、様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓いていくこと。

このことを本部会では、「未来を切り拓く」と定義し、上記の情報活用能力と併せ、「未来を切り拓く情報活用能力の育成を目指した授業」として創造し、推進したい。

(2)「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実について

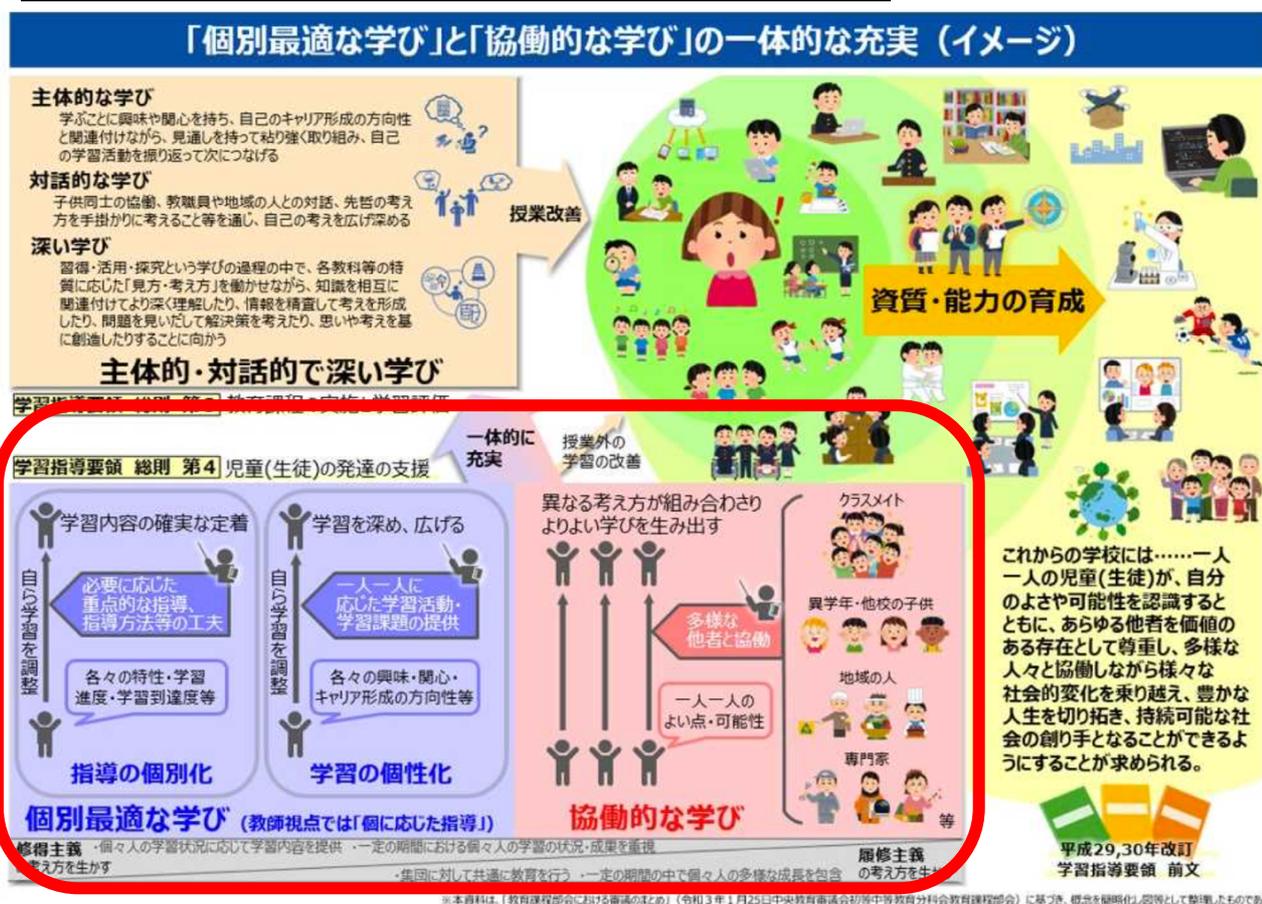


図1 「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」^⑥

上のイメージ(図1)をもとに、本部会における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を考えると、学習指導要領において示された資質・能力の育成を進めるために、学校における基盤的なツールとなるICTを最大限活用しながら、次の2点が求められていることを読み取ることができる。

- ①「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を図ること
- ②主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を行うこと

1人1台端末環境が実現した今、ICTを最大限に活用しつつ、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させていく必要があると考える。

3. 2020年代を通じて実現すべき「令和の日本型学校教育」の姿

① 個別最適な学び（「個に応じた指導」（指導の個別化と学習の個性化）を学習者の視点から整理した概念）

- ◆ 新学習指導要領では、「個に応じた指導」を一層重視し、指導方法や指導体制の工夫改善により、「個に応じた指導」の充実を図るとともに、コンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段を活用するために必要な環境を整えることが示されており、これらを適切に活用した学習活動の充実を図ることが必要
- ◆ GIGAスクール構想の実現による新たなICT環境の活用、少人数によるきめ細かな指導体制の整備を進め、「個に応じた指導」を充実していくことが重要
- ◆ その際、「主体的・対話的で深い学び」を実現し、学びの動機付けや幅広い資質・能力の育成に向けた効果的な取組を展開し、個々の家庭の経済事情等に左右されることなく、子供たちに必要な力を育む

指導の個別化

- 基礎的・基本的な知識・技能等を確実に習得させ、思考力・判断力・表現力等や、自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度等を育成するため、
・支援が必要な子供により重点的な指導を行うことなど効果的な指導を実現
・特性や学習進度等に応じ、指導方法・教材等の柔軟な提供・設定を行う

学習の個性化

- 基礎的・基本的な知識・技能等や情報活用能力等の学習の基盤となる資質・能力等を土台として、子供の興味・関心等に応じ、一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身が学習が最適となるよう調整する

- ◆ 「個別最適な学び」が進められるよう、これまで以上に子供の成長やつまずき、悩みなどの理解に努め、個々の興味・関心・意欲等を踏まえてきめ細かく指導・支援することや、子供が自らの学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められる
- ◆ その際、ICTの活用により、学習履歴（スタディ・ログ）や生徒指導上のデータ、健康診断情報等を利活用することや、教師の負担を軽減することが重要

それぞれの学びを一体的に充実し 「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげる

② 協働的な学び

- ◆ 「個別最適な学び」が「孤立した学び」に陥らないよう、探究的な学習や体験活動等を通じ、子供同士で、あるいは多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実することも重要
- ◆ 集団の中で個が埋没してしまうことのないよう、一人一人のよい点や可能性を生かすことで、異なる考え方が組み合わせり、よりよい学びを生み出す

- 知・徳・体を一体的に育むためには、教師と子供、子供同士の関わり合い、自分の感覚や行為を通して理解する実習・実験、地域社会での体験活動など、様々な場面でリアルな体験を通して学ぶことの重要性が、AI技術が高度に発達するSociety5.0時代にこそ一層高まる
- 同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや、ICTの活用による空間的・時間的制約を超えた他の学校の子供等との学び合いも大切

2

図2 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）」概要^⑦

◎ 個別最適な学び

「個別最適な学び」とは、「指導の個別化」と「学習の個性化」を学習者の視点から整理した概念である。（図2）本部会では、1人1台端末を活用し、個別最適な学びを実現するために、ICTを基盤とした先端技術や教育データを活用していくことには、大きな可能性があると考えている。これらを活用することで得られる具体的な効果として、次のようなものが期待される。

「個別最適な学び」の実現のために、ICTや教育データを活用して得られる効果

- 時間・距離などの制約を取り払い、外部人材・機関などの最適で良質な授業・コンテンツ(学校放送番組など)の活用がしやすくなる。
- AIを活用したドリル教材の活用、センサ等による子供の状況の把握など、個別最適な学びや支援がしやすくなる。
- 指導や学習履歴(スタディ・ログ)・行動等のデータの収集・分析による可視化や体系化、個々に応じた効果的な学習方法の特定、ベテラン教師からの引き継ぎなど、可視化が難しかった学びの知見の共有やこれまでにない知見の生成がしやすくなる。
- 自動的かつ継続的なデータの取得や情報共有の即時化、校務の効率化がしやすくなる。

◎協働的な学び

「協働的な学び」とは、異なる多様な他者との学び合いを指すと考える。「答申」では、「『協働的な学び』は、同一学年・学級はもとより、異学年間の学びや他の学校の子供との学び合いなども含むものである。知・徳・体を一体で育む『日本型学校教育』のよさを生かし、学校行事や児童会(生徒会)活動等を含め学校における様々な活動の中で異学年間の交流の機会を充実することで、子供が自らのこれまでの成長を振り返り、将来への展望を培うとともに、自己肯定感を育むなどの取組も大切である。⑤」としている。

本部会では、1人1台端末を活用し、協働的な学びを実現するために、学習支援システムやWeb会議システムなどのICTを活用していくことは、大きな可能性があると考えている。これらを活用することで得られる具体的な効果として、次のようなものが期待される。

「協働的な学び」を実現するために、学習支援システムやWeb会議システムなどを活用して得られる効果

- 話し合いが可視化でき、全員の意見を整理しながらの確認がしやすくなる。
- 個々の意見を共有することで、複数の意見や考えが整理しやすくなる。
- グループでの分担、協働による作品の制作がしやすくなる。
- 学校の壁を越え、遠隔地や海外の学校等との交流がしやすくなる。

本部会でも、ICTを基盤とした先端技術や教育データを効果的に活用した、「全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学び」と学習支援システムやWeb会議システムなどのICTを活用した、「全ての子供たちの可能性を引き出す、協働的な学び」を実現させるための取組を進めていきたい。なお、授業づくりを進めていく際には、それぞれの学びの成果を生かし、更なる成果を還元するなど、互いの要素を組み合わせながら、一体的な充実を図ることが必要であると考えている。

4 研究内容

本部会では、今年度の研究の柱を次のように設定した。それぞれの柱の具体例は、次の通りである。

柱① 問題解決・探究における情報活用に関する授業の創造と推進

問題解決に必要な情報を集め、整理・分析・解決への見通しをもつことができる授業例

- ・思考ツールを用いて、情報や自分の考え、他者の考えを整理、分析する。
- ・授業支援システムやクラウドを活用して情報を共有し、考えを比較する。
- ・生成AIに文書を生成させたり、アンケート結果を分析させたりして、自分たちの考えと比較する。
- ・授業支援システムやクラウドで提出されたものを指導者が即時評価する。等

柱② プログラミング的思考を育成する授業の創造と推進

繰り返しを含んだプログラムの作成や問題解決のためにどのような情報を、どのような時に、どれだけ必要とし、どのように処理するかといった筋道を立て、実践しようとする授業例

- ・社会に役立つものや未来のまちなど、新しいものを創造する。
- ・教科の内容をより確実に学習するため、学習内容や学習工程を順序立てて構成等を考える。
- ・ロボット等を活用し、試行錯誤しながら継続的に改善する。
- ・学習した内容を組み合わせ、より相手に伝わるように発信する。等

柱③情報モラルを育成する授業の創造と推進

SNS、HP 等、相互通信を伴う情報手段に関する知識及び技能を身に付けるものや情報を多面的、多角的に捉えたり、複数の情報に基づいて自分の考えを深めたりする授業例

- ・ 自他を大切にし、安全で信頼できる情報社会を築く為、個に応じた情報手段の活用方法を考える。
- ・ SNS やブログ、掲示板などへの書き込みを疑似体験し、適切な情報の送受信を考える。
- ・ ID、アカウント、パスワードの管理方法やセキュリティについて調べる。
- ・ 放送番組や疑似体験を通して、相互通信や Web 上で発生した問題に対する解決策について考える。等

【付記】

(1) 情報活用能力の育成について

2025 年 9 月に行われた中央教育審議会の教育課程企画特別部会では、情報活用能力を「各教科等における探究的な学びを支える基盤」と位置付け、その抜本的な向上を図る方針が示された。

具体的には、小学校の「総合的な学習の時間」における「情報の領域（仮称）」の新設や、中学校における「情報・技術科（仮称）」の創設といった、教科構成の見直しを含む踏み込んだ方策が検討されている。小学校段階においては、以下の三つの側面から体系的に資質・能力を育むことが重視されている。

①「情報技術の活用」②「情報技術の適切な取り扱い」③「情報技術の特性の理解」

これらは、①の力を発揮するために、②、③を構成要素とすることが整理され述べられている。

生成 AI の急速な普及など、技術革新が激しく予測困難な社会において、情報を主体的に捉え、適切に活用する力は、子供たちが自らの人生を切り拓いていくために不可欠な資質・能力である。こうした背景から、教育課程全体を通じて、今後より一層情報活用能力の育成が重要になる。

(2) 生成 AI の活用に関する注釈

生成 AI を活用するにあたっては、文部科学省から出ている「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン」をよく参照すること。特に、児童が活用する場面においては、慎重に検討を行うこと。

◎生成 AI を活用していく上で重要であると考えられるポイント

- ・ 便利さと共に、誤りを含む出力（ハルシネーション）の可能性や情報の真偽を確かめる力（ファクトチェック）の必要性等生成 AI の特性を教師も児童も理解しているかどうか。
- ・ 生成 AI を活用する目的を教師も児童も明確にもち、理解しているかどうか。
- ・ 生成 AI の活用が児童の資質・能力の育成にどのように寄与しているのかを見とる手段を講じているかどうか。

教師の活用事例

- ・学年だより等の保護者向けの文書、校内研修の資料、ワークシートといった文書や資料等のたたき台を作成する
- ・学習指導要領、「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する資料、教科書会社の指導計画等を読み込ませた生成 AI とやりとりをしながら指導案を作成する。また、授業で設定した課題を生成 AI に入力し、児童がどのような対話を行うかシミュレーションさせ、教師が課題設定や発問等の適切性を事前に検証する。
- ・児童の授業の感想や振り返りの内容をクラウド上で集約し、生成 AI を用いてその内容を整理・要約する。これを基に問題や次時以降の指導案のたたき台を作成する。等

児童の活用事例

- ・生成 AI（ネット検索における AI の要約を含む）が生成する誤りを含む出力（ハルシネーション）を教材として使用し、AI の性質や限界に児童が自ら気付けるように学習活動を展開する。これにより、情報の真偽を確かめる力（ファクトチェック）や、AI に過度に依存しない冷静な態度を養う。
- ・生成 AI からどのような回答が出力されて、自分はどのようなことを考えて、どのように返したのか等、生成 AI とのやりとりをクラス全体で共有する。生成 AI に対する向き合い方を考える過程を通して、適切な活用方法を学ぶ。
- ・グループ学習や探究活動の途中段階で、児童間の議論やまとめを行った上で、生成 AI に新たな視点や意見に対するアドバイスを出力させる等、議論を深める目的で活用する。
- ・児童が自ら作った文章を生成 AI に修正させたものをたたき台として活用し、児童自身が何度も文章を推敲する過程を通して、適切な活用方法を学ぶ。
- ・児童が課題に対する答えを入力し、生成 AI に自分の考えを説明する。そして、生成 AI に課題解決に繋がるような助言を出力させたり、助言を受けて修正した考えをもう一度入力したりする。そのような生成 AI との壁打ちを通して、児童が自分の考えを広げたり深めたりする目的で活用する。
- ・教師が見取る場面を設定することを前提とした上で、児童が学習の振り返りを入力し、生成 AI に助言を出力させる。生成 AI は、児童の学びに向かう姿勢に対するメタ認知を促進し、児童の自己調整力を高める補助的な役割を担わせる目的で活用する。等

5 事業計画

《日程》（■本会主催研究大会・研修会、○は理事会・事務局会）

2026（令和8）年

- 5月8日（金） ○第1回理事研修会（教育会館）
- 5月15日（金） ○第1回事務局研修会（教育会館）
- 8月3日（月） ■令和8年度徳島県小学校放送・情報教育夏季研修会 並びに
徳島県放送教育夏季研修会（教育会館）
- 11月27日（金） ■第56回放送教育研究会 並びに
第56回徳島県小学校放送・情報教育研究大会（高志小学校）
- 12月4日（金） 県小教研主題研究大会・教育文化講演会（Web開催）

2027（令和9）年

1月22日（金） ○第2回事務局研修会（教育会館）

1月29日（金） ○第2回理事研修会（教育会館）

2月下旬 「徳島放送情報教育 vol.68」 発刊予定

<引用文献>

- ・ 文部科学省(2024)「教育振興基本計画」^①p.21 ^②p.10
- ・ 文部科学省(2021)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」^③p.20^⑤別紙 p.7
- ・ 文部科学省(2019)「教育の情報化に関する手引」^④はじめに ^⑤p23
- ・ 文部科学省(2021)
「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」^⑥p38
- ・ 文部科学省(2021)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して（答申）」概要^⑦p2

<参考文献>

- ・ 文部科学省(2018)「新時代の学びを支える先端技術活用推進方策(最終まとめ)」
- ・ 文部科学省(2019)「情報活用能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントの在り方と授業デザイン
-平成30年度 情報教育推進校(IE-School)の取組より-」
- ・ 文部科学省(2019)「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた ICT 活用の在り方と授業事例
-平成30年度 ICT 活用推進校(ICT-School)の取組より-」
- ・ 文部科学省(2021)「令和の日本型学校教育」の構築を目指して
～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～(答申)」
- ・ 文部科学省(2021)
「学習指導要領の趣旨の実現に向けた個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実に関する参考資料」
- ・ 文部科学省(2024)「教育振興基本計画」
- ・ 「徳島教育大綱 徳島県教育振興計画 第4期」(2024)
- ・ 中央教育審議会 教育課程企画特別部会「論点整理」(2025)
- ・ 「初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン (ver.2.0)」(文部科学省 2024)
https://www.mext.go.jp/content/20241226-mxt_shuukyo02-000030823_001.pdf
- ・ 「教育課程企画特別部会 論点整理」(文科省 2025)
https://www.mext.go.jp/content/20251225-mxt_kyoiku01-000045057_01.pdf
- ・ リーディング DX スクールの実践事例
取組紹介 | リーディング DX スクール
指定校実践事例・動画 | リーディング DX スクール